

委員講評

選定委員長 鈴木 道雄

「手づくり郷土賞」は、地域の個性、魅力を創出している各種の良質な社会資本を広く発掘し、これを広く紹介することによって個性的な地域づくりの一助とすることを目的に昭和61年度から実施してきました。昨年度からは、良質な社会資本に加えて、社会資本と関わりを持ちつつ地域の個性、魅力、活力を創出している良質な活動もその対象とし、『地域整備部門』及び『地域活動部門』の2部門により実施しております。

本年度の「手づくり郷土賞」について、

『地域整備部門』では、計画段階において住民や市民団体が積極的に参加している事例、既存の社会資本や景観を利用し、歴史・文化を守りながら地域の振興やより良い景観の形成につなげている事例、特有の産業や資源を活用し、個性ある地域のシンボルとなる社会資本を整備している事例等が多く見受けられました。さらには住民の間で協定を結ぶことにより、住民が積極的に社会資本の整備・管理に関わる事例もありました。

社会資本の計画や整備・管理の段階における住民と行政との協働関係の構築によって、社会資本に対する住民参加が促進され、地域に愛される社会資本やその整備・管理手法が全国的に広まり、個性的な地域が増えていくことを期待します。

『地域活動部門』では、今般の環境への意識の高まりから、環境の保全・回復への取り組みや、自然との触れ合いの場、自然に関する学習の場を提供することにより自然や環境の大切さを子どもたちに教える活動等が多く見受けられました。また、5年を超えるような長期にわたる粘り強い活動により中心市街地の活性化や環境の保全などに効果をあげている事例や、多数の活動主体や広い年齢層が参加することでコミュニティの再構築に成功している活動、住民間のコミュニケーションを主たる目的として社会資本を活用している活動なども見受けられました。

これらの取り組みが全国的に波及し、個性的で魅力ある地域が形成されるとともに、コミュニティの再構築や住民間のコミュニケーションがさらに促進されることを期待します。

両部門を通して、積極的な住民参加や住民と行政の協力により地域の個性や魅力が創出されている事例が数多くあり、「いかにして自分達の地域を良くするか」という意識が全国的に高くなっていることが感じられました。「手づくり郷土賞」を通じてこのような取り組みがさらに広まっていくことを期待しております。

酒井 孝 委員

『地域整備部門』については、地域の歴史、文化に根ざした街並み、建物、固有の自然等を再認識し、地元関係者の参加を求めて再構築、再生を図り、新しいまちづくり、ふるさとづくりの良い取り組みが見える。また、本当に地域が必要としている生活ダム、公園等に住民、地域がより身近に感ずる創意工夫をして地域の活性化にプラスとなる整備を進めている試み、また地域活性化の拠点づくり、交流の場として育ててゆこうとする試み、全般にしっかり地域に根ざした、健全な取り組みが多く見られた。

『地域活動部門』については、活動の切り口が多数で、なかなか客観的評価になりにくい。

既存の住宅、社会資本を地域の歴史、文化の核ととらえ、地域の活性化と結びつけてゆく活動、またその活動の定着に向けての工夫と導入しようとしている仕組みについて着目してみた。

両部門ともに限られた文書と写真で判断し評価をしていくわけであるが、何を評価してほしいのか表現が不十分な箇所が多く見受けられ、プレゼンテーションに工夫が必要と思われた。

高橋 潤二郎 委員

本年度の全体的な特徴は「地域住民や市民団体の積極的な参加」、「歴史、文化的資産の活用」の事例が多く見受けられたことである。

「地域住民や市民団体の積極的な参加」については、施設整備や施設活用の段階から、地域住民や市民団体が積極的に参加し、住民と行政が一体となって地域に根ざした整備や活動を行っていかうという動きが広まっていることが強く感じられた。また、住民の参加も一過性でなく、継続化していて、計画、維持、イベントなどが複合しつつあるすぐれた事例も出てきている。今後、地域として様々なノウハウを蓄積し地域全体の活性化に役立てていかれることを期待しています。

「歴史、文化的資産の活用」では、歴史、文化的資産を地域全体で受け止め、伝統文化の継承や地域の活性化に取り組んで組んでいる事例が多数見られた。住民が地域の文化や歴史を尊重し、郷土を創出していく流れが浸透し、地域として次世代に託し、伝えていきたいものを選択するという動きが各地に広がっていくことが望まれます。

これからのまちづくりは、地域の個性や魅力を創出する社会資本の整備だけでなく、地域の個性、魅力、そして活力を創出する活動によって推進されることを大いに期待しています。

田村 美幸 委員

本年2年目を迎えた『地域活動部門』の応募内容が益々充実してきているのを感じた。選ばれた夫々のグループに共通しているのは、住民のその地域への愛着とこだわりである。何とか自分達の住む環境を快適にしたいという想いが、息の長い運動へのエネルギーと又創意工夫となって現れている。

しかし審査をしていて気になった点がある。川と緑の保全を目的とするグループ活動の中には、必ず「ごみの清掃」というのが含まれる。以前だと、住民が定期的にクリーンアップ作戦を行うことだけで素晴らしいと思えた。しかし今必要なのは次の段階である「捨てる人を減らす」という運動ではないか。どうすればごみを減らせ、捨てる人を減らせるかを住民みんなで考えなければ何時までも「捨てる人」と「拾う人」との構図はなくなれないと思うのだ。クリーンアップする毎にごみが減っていくのを目標に出来るのが今後の課題だと思う。

『地域活動部門』における、萩市の「市役所前中央分離帯整備」について、新しい行政の取り組み方として注目したい。国道の拡幅工事に伴い、伐採が計画されていた桜を、市民から残して欲しいという要望が出た。その市民からの要望に対して、萩市の取った柔軟な態度は、今後の行政と市民の関係でお手本となるものである。萩市は中央分離帯を広げることを国に交渉し、そこに桜を植えることで市民の望みをかなえ、その結果としてシンボルロードとして相応しい立派な道路空間を創出したのである。下水工事により発生した、笠山石を景石として利用したり、維持管理が困難な中央分離帯へのこまやかな工夫がなされている。

このことにより萩市と市民との信頼関係がどれほど増したか、また今後の萩市における「市民との協働」がどんなにやり易くなったかと推察するのである。

中村 良夫 委員

『地域整備部門』について見ると、道路や河川などを単体として見るのではなく、町づくりという総合的な目標へ向かって多角的なアプローチをするプロジェクトに佳作が多い。道路にしても道路敷の中だけのデザインではなく、民家のデザインや保護に取り組んで欲しい。公園も緑だけでなく、様々な機能の建築や施設を複合化して地域活性化の実を挙げなければならない。

以上のことは、『地域活動部門』にも言えることであって、一過性のイベントではなく、食文化、環境、街並みなどを総合化する戦略性が重要であり、環境にしても単純なホタル飼育でなく、里山の生態系全体の復元とコミュニティ再生を結びつけるようなプロジェクトに共感を覚える。

なお、全体を通して言えることだが、個別施設のデザインについては一段と工夫が必要。やや幼稚なものが多いと思われる。

西村 幸夫 委員

今年の手づくり郷土賞への応募は例年よりやや少なかったようですが、ひとつひとつの応募内容はきめの細かなまさしく「手づくり」の名を現すような作品や活動が多く、充実したものでした。

地域整備部門ではとりわけ道路環境を改善した事例に注目すべきものが多かったように思います。たとえば北から置戸町の街並み整備事業による道道の改善や平塚市の「まといさんぼみち」、豊田市の若宮・西町緑陰歩道、岡山県真備町の名探偵金田一耕助ミステリー遊歩道、萩市の市役所前中央分離帯整備、善通寺市の善通寺地区まちづくり総合支援事業による大門通りの整備などです。規模の大小はありますが、いずれも楽しく歩け、ドライバーにも優しい快適でかつ美的にもすぐれた道路が生まれています。これと並んで河川的环境整備の成果が目につきました。とりわけ北九州市の金山川の自然あふれたさりげない整備のあり方は、あまりにも自然にあたりの風景に馴染んでいるために目立つことはありませんが、そのことがかえって整備の質の高さを物語っており、とても印象に残りました。

地域活動部門では、里山やブナ林の保全やほたるの里づくりなど、本格的な自然を対象とした活動のひろがり特徴的でした。里山や小川も地域の有力な社会資本であるという視点が背景にあることが実感できます。自然も人工物もひとしく私たちの地域をつくりあげていることに寄与しているのですから、こうした視点は当然だといえます。一方、会津若松市の通りの資源を活かした「大正浪漫」のまちづくりのように、長年の地道なまちづくり活動が魅力的な町並み景観を生み出すに至っている例を目の当たりにすると、日々のたゆまぬ活動がいかに大切かを実感させられます。

魅力的な郷土を築き上げるため、これからもさらに地域の方々の更なるご健闘に期待したいと思います。

藤吉 洋一郎 委員

『地域整備部門』には、相変わらず数十億円から百億円といった大事業の応募が目立つが、「手づくり」のイメージから遠くなるので選ばなかった。一方で、『地域活動部門』は、資金面の評価が不明なために活動のみを切り離して評価することになったが、施設計画と一体のものであり、情報として必要だと思う。

両部門ともに、住民参加、もしくは住民主体による地域からの発想を大切にしたいと考え、同時に行政の柔軟な対応が目立つものを良く評価した。

藤原 まり子 委員

地域整備部門に応募した作品の中には、歴史のある施設を他の目的に転用する為の整備、基幹産業の為の施設を観光交流施設に、水防竹林を公園として整備する、或いは今までは鉄道高架の下の忘れられた空間を、あるランドマークへのルートとして整備するなどさまざまな取り組みがありました。特に今までの施設、環境（省みられなかった空間も）をより人々の生活に近づける取り組みが多く見られました。地域の人達の発案と努力が人々のごく普段の生活の質を向上させる。ここに手作りの良さを実感しました。大規模な整備に頼るのではなく、自分達の豊かなアイデアで一つ一つ豊かさを勝ち取っていくことで確実に豊かになっていくだろうという期待を持ちました。細かいデザインモチーフの乱用は必ずしも評価できるものではないので、飾るよりは、削ぎ落とす、足し算よりは引き算を大切に今後の整備を考えていただきたいと思います。

地域活動部門の非常に多くが、自然環境に十分留意しながらの取り組みであることに“美しい国土の形成”は少しずつではあるが人々の手によって進んでいると勇気を得ました。出来れば、身近の自然を守ることが毎日の生活の一部になるように、さらに活動を広げていただきたいと思います。特に里山の整備は急務で、今後はさらに多くの里山についての取り組みを期待します。

自然についてさらに学習しようという活動も多く、知識と見識に根ざした活動として、そこを訪れる人達とも共有できる“共感”出来る活動も考えて戴きたい。

前田 正孝 委員

『地域整備部門』、『地域活動部門』とも、地域の人々が熱心に郷土づくりに取り組んでいる様子がうかがえた。

魅力ある郷土、思い出の詰まった郷土は憧れであり、また、心のよりどころである。今回の応募の中で、子供たちが積極的に参加しているものがあり、嬉しく思った。その子供たちが大人になった時、自ら参加して得たであろう「自然を大切にする心」、「自然と調和した身近な社会資本の大切さ」、「元気な郷土づくりへの参加意識」などは、忘れることのできない貴重な財産となるはずである。

「手づくり郷土」の輪が広がり、地域の人々が誇れる立派な「手づくり地域」が実現することを期待したい。

三沢 真 委員

地域の方々为主体となって事業者とともに創意・工夫することによって、魅力ある地域づくりを推進することができます。今回の応募物件の中にも、そのような物件が多く見られ、全国的に地域づくりへの住民の関心が高まっていること、住民の参加が広がっていることがうかがえました。

また、活動期間が5年を超える息の長い活動も多くあり、地域の方の地道な努力によって、地域が支えられているということを感じました。このような取り組みを正しく評価し、行政がバックアップすることで、地域と行政の信頼関係が強力になるものと考えます。

今回受賞された物件を広く周知することで、今後全国で取り組み始めようとしている地域の参考とし、個性ある魅力的な地域が増えてゆくことを期待しております。

代表事例講評

『地域整備部門』

「善通寺地区まちづくり総合支援事業」 (香川県 善通寺市)

善通寺市は、四国八十八ヶ所のうち五ヶ所の札所を擁した門前町のイメージがあるが、旧陸軍にまつわるレンガ造りの兵舎を始めとする明治、大正期の建造物群も多数残されており、これらの歴史、観光資源を活用した中心市街地活性化を目指して、人にやさしく質の高い生活空間の創造を図っている。特に、水路、照明灯などの構造物、市民アンケートで決定した歩道のレンガのデザインなどによって、周囲の景観とマッチした質の高い空間が形成されている。さらに、『里親』による道路や公園の維持管理活動も実施しており、地域住民と行政が一体となって、美しい街並みを維持する取り組みがなされている。以上のように当該地域では面的な整備による個性的なまちづくりが地域住民を主体に行われており、このような取り組みが他の地域に波及することを期待している。

「柳が崎湖畔公園（びわ湖大津館）」 (滋賀県 大津市)

滋賀県下初の国際観光ホテルであり大津市のシンボルとして市民から愛される琵琶湖ホテルの移転に伴い、取り壊される予定であった施設を市民の声に応じて保存改修し公園と併せて整備を行っている。公園整備の内容に関する意見公募、施設名の一般公募など、計画段階から住民参加の機会を設けて整備にあたっており、現在は市民グループを中心に、市民交流、文化活動の場として親しまれ、市民が生み、育てた施設となっている。また、琵琶湖ホテル閉館後、休止状態となっていた棧橋を利用して、湖上交通という「湖都おおつ」にふさわしい交通手段も導入し、公園の魅力を高めている。歴史的建造物を保存するだけでなく、利用という観点を取り入れたことは大いに評価できる。

「置戸町街並み整備事業」(北海道 置戸町)

置戸町街並み整備事業では、「住み慣れた街で、暮らしを続けるために」を基本コンセプトに、計画から維持管理まで住民の参加を得て整備を行っている。また、林業で発展してきた経緯から、照明柱、ベンチ等に地域資源である木を利用している。電線類地中化は採択されなかったが、電柱の町道への裏回しによる大通り商店街無電柱化や、商店街の統一看板支柱、街並みガーデニング、大通り商店街まちづくり協定による商店街の歩道境界からの50cmセットバックなど、町民の自発的な取り組みによる地域整備も行われている。さらには、町と地域の協定による流雪溝や道路の維持管理など、官民一体となって個性的な街づくりにあっている。住民の自発的な参加が周辺地域にも波及することを期待している。

『地域活動部門』

「^{とお}通りの^{しげん}資源を^い活かした『^{たいしやうまんちやう}大正浪漫調』のまちづくり」

(^{なのかまちとお}七日町通り^{まちなみ}協議会 / ^{きやうぎかい}福島県 ^{ふくしまけん}会津若松市 ^{あいづわかまつし})

七日町通りには、大正から昭和初期にかけての建築物が多数残っており、これを保存、修景することで「大正浪漫調」の景観整備と中心市街地の活性化が図られている。活動は、平成6年に一部の商店主が「七日町通りまちなみ協議会」を設立して開始され、建物所有者への粘り強い働きかけ、市の様々な補助制度の導入などによって、現在では、連続した非日常的な空間が形成されるとともに、地域コミュニティの再構築にも寄与している。景観に合わせた骨董やジャズ、着物などをテーマとしたイベントを行うことで、当初は人通りがなかった商店街が、現在は観光客で賑わうようになっており、経済的な波及効果も大きい。さらに、同様の取り組みが近隣にも広がっており、全国的にも先進的な事例となっている。商店街と行政が一体となった粘り強い取り組みにより、地域の活性化に成功し、そのことが他の商店街にも波及している点について、その意義は大きいと考えられる。

「^{かべがわあじさいゆめろーど}鴨部川アジサイ夢ロードづくり」

(^{かがわけん}香川県 ^{さぬきし}さぬき市 / ^{かべがわあじさいゆめろーどぞうたかい}鴨部川アジサイ夢ロード造田の会)

地元小学校の子供達が発案した「アジサイロードづくり」を、地域と行政が協力して行っている。アジサイの苗づくりを子供たちが、アジサイを植える棚や土の整地を老人会、PTAが行い、地元農家が堆肥の提供を、地元企業が棚を止める杭打ちを行うなど、適切な役割分担のもと地域が一体となった取り組みを行っている。また、月1度のアジサイ管理など、定期的かつ継続しやすい内容で、ボランティア活動を展開している。これらの活動により川べりで遊ぶ子供達や、ボランティアへの参加者が増えている。単なる鴨部川の美化活動にとどまらず、自然環境を大切にする取り組み、地域づくりに繋がる活動を展開しており、河川美化活動を地域コミュニティの活性化につなげ、また、官民が情報交換しながら進めることで、継続的な取り組みとなっている点について大いに評価できる。